弔湯浅幸孫先生文

謹んで恩師、京都大学名誉教授　湯浅幸孫先生の御霊に哀悼の辞を捧げます。

ここ数年、忙しさにかまけて、時折電話や便りを差し上げるだけで、お目にかかることはございませんでした。最近ご体調がすぐれないとうかがい、お見舞いにうかがわねばと思いながら、それを果たさぬうちに今日を迎えてしまいました。申し訳なさとともに、もうあの温容に接することができないかと思うと淋しさで一杯です。

私が先生にはじめて拝謁したのは、三回生に上って中国哲学史専攻の学生となった昭和四四年の春の教室ガイダンス（当時は昼食会といっておりました）の折のことでした。痩身でいかにも教授然とした威厳をおもちの重澤俊郎先生に対し、当時助教授であった湯浅先生はやや丸々とした風貌で、優しそうな先生との印象をもったことを憶えております。

当時はいわゆる大学紛争の真っ只中で全学スト中、文学部もバリケード封鎖されていまして、学期は始まったものの授業は行われていませんでした。そこで自主学習ということで、学外で両先生に本読みをしていただくことになりました。私自身はスト破りをしているような後ろめたさがあり、本当は心進まなかったのですが、先輩方のお勧めもあり、参加させていただくことにしました。その時、湯浅先生に読んでいただいたのが皮錫瑞の『経学歴史』でした。その読書会はやがて参加者は私一人ということになり、先生と一対一で本読みをしていただくというこの上ない贅沢な時間となりました。私がいくらかでも中国古典が読めるようになったのはまさにこの時

の本読みのお蔭であり、いま想い起こしても文字どおり「ありがたい」貴重な機会であったように思われます。この本読みの折に先生は、個人的な経験談も含めて実にいろいろなことを教えて下さいました。後に私が助教授として先生に侍した際には事務的な相談が多く、それほど個人的なお話をうかがうことはありませんでした。その意味でも、湯浅先生との思い出というとまずこの最初の本読みのことが出てまいります。

当時の先生は、山口大学より京都へ移られて八年目、学者として成熟期にかかられていました。翌四五年、重澤先生ご退官の後を承けて教授にご昇任、以後定年までの十余年間、研究室運営の重責をほとんどお一人で担われました。私が学生・院生としてすごした期間の大半がちょうどその時期に当っております。したがいまして私にとりましては、先生がほとんど唯一無二の恩師ということになります。もちろん、講筵に列し、また公私にお教えを受けた先生方は多数いらっしゃいますが、我が師匠と呼ぶべき先生は私には湯浅先生を置いて他にありません。これは、本日ここに参列されている私の同学諸氏の多くも同じ思いであろうと思います。

これだけ多くの優秀な人材を養成されたのはひとえに先生の学識と仁徳によるものでありますが、それはまた先生の教育者としての力量の大きさを示すものにほかなりません。ただその教育方法は、事細かに厳しくかつ逐一指導するというものではありませんでした。むしろその逆、すなわち放任主義でありました。もとより、この放任主義とは京大伝統の良き意味でのそれであります。私は先生が声を荒らげたり、学生を人前で叱責される場面は一度も目にしたことはありません。もちろん、演習の調べが足りなかったり杜撰な発表をしたりすれば、お小言を頂戴しましたし、論文の不備は容赦なく指弾されました。が、それはあくまで学問上のことであり、またその口調はいつも穏やかでありました。まさしく初印象どおりの優しい先生でありました（実は、それだからこ

そ本当は一番怖いのだと後で気づくことになりましたが)。

先生はいろいろアドバイスすることはあっても、自分の意見を押しつけることは決してなさいませんでした。型にはめるよりも、それぞれの個性に合わせてしたいことを自由にやらせるのがよい、それが先生の一貫した不動の方針、と言うより信念であられたと思います。我々はそのお蔭で何ら萎縮することなく、いまから思えば師に対して失礼であったと悔やまれるほど、自由気ままにやらせていただきました。

先生がいつも口にされていたのは、古人の糟粕を嘗めるな、原典を読んで自分で考えろということです。原典をしっかり読め、中国思想史研究とはつまるところ古典を読むことだ、先生が私どもに教えて下さったのは、結局その一事に尽きると思います。と申しますと、いかにも先生が理論を軽視していたかのように聞こえるかもしれませんが、むろんそうではありません。そのことは御高著『中国倫理思想の研究』を繙けば、一読、誰の目にも明らかでありましょう。そこではマックス・ウェーバー社会学をはじめとする社会科学の理論が縦横に駆使されております。ここに我々は文献学の基礎の上に立った社会思想研究という京大中哲史の伝統を先生が見事に引き継がれていたことを知ります。また、日頃は政治的言動を慎まれた先生が、その底に社会的不正義に対し強い憤怒を抱かれていたこともうかがえます。

ただ先生は、浅薄な理論を振りかざし、まともに本を読まないで、見端よく飾った研究と称するものを何より嫌われました。本読みこそが全ての研究の基礎、それが先生の信念でした。はからずも私が助教授として戻ってくることになった折、その人事が可決された教授会のあと、先生は私をお呼び出しになり、教官の心得を説かれました。いろいろ細かいご指示があるものと覚悟していた私に先生が言われたのは、旧套にとらわれるな、古典

をしっかり勉強しろ、というわずか二つのことだけでした。あれこれ思い煩う必要はない、自分がきっちり古典を読んでいさえすれば学生は勝手に伸びるものだし、本が読める人はいい論文もおのずと書けるものだ、僕もそうしてきたのだから、と諭されました。いつまで経っても先生ほど本が読めるようにはなりませんが、私が今日までなんとかやってこれたのは、この先生のお言葉を支えにしてきたればこそです。

現在、大学を取り巻く環境は厳しく、独立行政法人化だの21世紀C・O・Eプロジェクトだの、実用性と効率と外面のよさだけを追い求める浅はかな外圧が日々強まってきております。古典研究といった浮世離れした学問は無用の長物として切り捨てられかねない状況に至っております。それを思えば、先生は古き良き時代に学究生活を送られたとうらやましく感じずにはいられません。が、このような時代なればこそ、原点に立ち返り、先生のお教えを胸に抱いて、読書の学という中国哲学史研究室の伝統を守り伝えていきたいと念願しております。

先生の御霊の安からんことをお祈り申し上げますとともに、これからも私どもを見守りお導き下さいますようお願い申し上げます。

湯浅先生、本当に長い間ありがとうございました。

二〇〇三年三月二日

受講生代表

池田　秀三